小栗外傳

初編　六

へ13
204
6

六へ 13 204

侠客は日毎に集り酒肉を飲食し。果ハ闘争を仕出しけるを田鍋兄弟
素より力量軽捷の少年なれバ是が制し止むるに一回も不覚をとらじ
ことなし。此ころ街々に笑へる行々に此土地に腕だてをする侠客は彼兄
弟を慢ることとこれを恐き。三縞七がのもとにいたれ人も酒わさは
りの居し后ハ田鍋兄弟が武芸を慕ひ。その枝芸学びんことをしらふに。
素より好る道なれバ。相撲太刀合の業を教けるが。衛ふに学ぶその
多く後ハ結城中の任侠ハ皆田鍋兄弟の弟子となりけり。一日田鍋
の弟子六七人。街を往来し。酒肆に過りて乱酔に及び。再び街に出て
傍若無人に徘り歩くに。所由緒ありげなる武士の六人打連立これ
旅客の西より東をさして来るのあるじが。間なく酔狂の侠客ゆ行達
より侠客ハ砕るを棄じ。此旅人を通さじと往還に立ふさがりたれ

悪口をいへば旅人憤り既に及ばんとせし其時旅客の中に老実やう
なる二人のものゝ人々を制し侠客に對ひこれは旅籠方のものならばこの
地方に尋ぬべき人ありて来るものなり其所をはやく通したまへといへば
侠客ばらも笑ひ旅籠人とあれば他國にても怨れて通しもならん此地方
においては管領執るのみにてもあらせ空しくは通さじ強て通らんとならば
我らが股を潜りて通りゆけと嘲られければ旅客は大きに怒り汝は士民の
身として武士に對ひ悪言をなすこそ緩怠なれ通さずば子細はなし尚
支ゆるとならば一々投殺して通るべしといひければこは面白しいざ投
らるべしと逆まに旅客に一般に心得たりといひさま勢ひ猛き侠客を
とつては投捉へては投げけるに幼童の戯に手玉とするがごとく三四回
まで投げたり侠客は初の勢ひにも似ずはくらずと恐れ戦き逃んと

されどもあまりに強く投げられし事なれば起きも得ず只蠢きて居たりけれ街
にて知るは幸に及びぬれば往来の人々すは喧嘩よと西より東より走
まどふに侠客ばらが常に是を厭ふより此處に走せ来りけるもの凡そ百人
に及び朋友の仇を報んと旅客を取囲みて逃さじとぞひしめきける旅人
此光景を見て寡は衆に敵しがたしとこれを見ん今は逃るべき処とて居極めし其
所へ声を高かにはじ人々兼ねて怨みあるに旅客は我救をなする味方なりと
呼ばりて大勢の侠客を制し出来る二人の大漢子ありまづ旅客の前に
跪き低頭してやけ君は正しく判官代助重ぬしにて在ますにや斯ある
ものを如何で忘れ侍らん某らは田鍋平太が男児にて平六郎平八郎と申し
兄弟のものにて候是なるものは渾名を我々が弟子なるべし君をば知るべき
無礼を敬せしと見えしこれは知らぬとはいへ其科を宥しあたへられんとなふに

小栗助重結城にして田辺兄弟に遭ふ

旅客のうち貴やかなる人不審しおりけるうちにて。田鍋兄弟ハ着一着て大に
驚き我をあるうち助重なり汝ハ田鍋兄弟なくありけるよ我汝をうかゞひ
此処にまわりし此危きに年十ヶ年難に及びしがよくも敵ひ得たり。汝
が弟子ホどが言れし素我をうたがひそれがしが何か苦しかるべしとありければ。
田鍋兄弟斜ならず悦び任侠に對ひ汝ホ此にありて只今の罪を謝し
なきとありけるにみな一般に平服して罪を謝しけりその時兄弟ハうちそれ
若殿の御身のゆかれもぞしていとおかしけれど光景みて我らをバ尋させ
ましとくへバされバとよ此ありしふさに子細あり。路にてみゝりの述
べしとおもふにぞさらバつん若ども小臣が敝屋に入らしもの人と案内しつ。
三輪七が酒楼に誘引三輪七に斯と告たれバ大きに驚き酒肴を出して
饗應たり。其時小栗を五人の人と田鍋兄弟ハ引合しその後に弟を

近く隣れ父の不圖を蒙りしこと田鍋平太が練ぬしこと等。詳に說話る。
平太が手前を与へたれバ兄弟おし戴き披きみんさそや中にありし。名ある年
頃く兄弟天狗五郎を害し。鎌倉の住居なりがたく。此地方に下りて
早や五年に及べり。其間君ヲ遠ざかり居たれバ。既にハ忘れ奉るを
幸ひをもとむくおもひ出して此に誘引まいりしこと父が願も叶ひ我ゝが歓び
此上なし些も此処を坐やしのあらバ。こゝに止りまします可く忠ある志へおげ。
またより三輪七と謀り甲斐ぐしくかしづきたる。維ちとちとこの田鍋
兄弟是もまた新田の臣にて再生し前に池庄司が得たるを首とし。今
田鍋兄弟に至りて渾て十人前世の因縁をもつて全せり。是より十一人
の徒君臣の義を守りく若艱を経るまで往く解を遠て知りあん。
さて小栗助重ハ父の勘氣を禀此地方に左遷居るよしを。常陸みな氣に

云終りければ。人々大きに驚きたる中にも。義登小次郎。後藤刑部へ深く泣て。君と艱苦を倶にせずんバ。臣の道にあらずと。不日に結城に来り。互に憂を語りあひ。是より十人忠を尽して助重に仕へ。主の勇氣の衆人に越るを頼ひ。其時をこそ待りけるに。不在話下再説。鎌倉にてハ小栗孫次郎満重ハ一時の怒りに乗じ。助重を逐けるが。早日月を経るにしたがひ。其日比の事を思ひ出し。漫に愛憐く。いと不便に思ひ。彼ハ素より孝子なりしに。ひさなれバ我を毒害せんとの為ける事ならん。是を必ず故ありぬべきに。そのことを問ひ明らめず一旦の怒りにはかりし退失ひしハ我誤しと後悔なすこと頻なり。それのみか又蒼浪ハおのれが謀叛現れバ限りなく喜びねれど助重を殺さんとはかりて本意なきによりて悟ひいたりもし満重の怒りを募らし助重が行方を尋ねて害なるやと。又讒言をかまへたれど。満重さらに聴きとおかず。

蒼浪を疑ふ氣色見えたれバ。斯てハ悪しと暫時其ことを止まりけれ。是ハ先年持氏公に亡されし上杉入道禅秀が子にて。上杉宮内少輔憲秋同舎弟治部少輔教朝といふものありしが。父亡びて後ハ京に上りて将軍家に仕へてありしが。父の仇を報いんとを心頻なれど時至らざれバ空しく日月を送りけるに。近比持氏公の御行跡いと驕りにまかせ給ひ。京都の将軍家へ対しぶ礼のみ多かりしかバ。将軍義持公憤りおはしけるに。内々鎌倉を亡さんとおぼしたちありしかど。世の中亦危きことも出来しまじかねと。上杉兄弟是を察し密に父の仇を報んことを嘆き乞ければ。将軍家御許容ありて我々加ふざるように密に父の讐を報ひと称して。兄弟が大きに悦び。密も南も討らんにざしと仰せ下されしかバ。憲秋教朝大きに喜び。一族家人を催しに与力同志のものの既に一千二百余に及びたり。斯てハ宿志を遂るに於べしと悦く

伊豆の三嶋まで攻下りしに鎌倉より居合たれし家人ども一さゝえも
支ず渾妻子を引倶して多く逃去たるもあれども手にさゝゆるものもなく終に
相州まで乱入し在々所々に馳向ひ代官は家人を捕へて首を切刻しかど。
いかなる故にや持氏公はみづから都へおもむかねば。家老ら兄弟の尚議会
まで責入んと思はれど僅なる勢のうへに且内意の無力なりければ
さまざまに議合ひ入ずして再び京都へ帰り上りけり。世系孫枚兄弟のゝ乃小栗
この家老が左馬以持氏公を京都将軍家家老兄弟をもつて我をうかゞひ
すみとおぼし憤をふくみ給ひ這回を我よりして付んと甚順倭るらみて。
戎器を集め軍兵を調練し今にも軍を出さんとするありしを執る家老
憲実大きに驚き持氏公を諫め給へどさらに聴入給はざれば
小栗満重を召て軍馬調練のことを命じ給へば小栗孫次郎呉を出して

大きに驚き持氏公に向ひ命畏り候へども今天下昇平にして廉を逐ふ
の時にあらず況て罪なき都へ責登り給ひし此事京都将軍の御聞に入らば
京都鎌倉忽ち呉越の仲となり給はん。再るときは先祖への不孝也
の嘆きとなり候はん。ひらに此事おぼし止まらせ給へと諫まゐらせしかど。
持氏公大きに憤らせ給ひ汝は老練の武士と思ひ一大事を命ぜしに
麒麟も老ぬれば駑馬に劣るとはよくいへり。鳴呼臆病未練の白痴かな。
さまでの人とおもひて此ことを任せべし。とくまかりて宜しつゝ慢心深く
入らせ給ふ良薬は口に苦く。忠言耳に逆ふと常言のごとく。小栗は君の御機嫌をいそぎ
く不興を蒙りぬとて本所をまかり退より引籠りて謹慎をまもりいたりし
ありこれや正に小栗が家の断絶すべき時の至れるにや。首尾よく思議の
孫を没けるに其うちにより満重君の御不審を蒙り終に征伐せられし

されバとて古見られ荒浪ハ助重を失ハん謀ありて人をして云ハしむるハ小栗判官代助重こそ父の無念を晴らさんと家を追出し憤りに堪ずして父ニ仇せんと近比無頼子弟を語らひ鎌倉中を放火し甚罪を父ニ帰せんとそこ云觸らしけれハ満重ハ引籠居られハ此事夢さりとも知ることも有るふりけれバ持氏公の御咎に入り。ふかく憤らせ給ひ満重ハおのれが子の鎌倉を騒さんと企れを知らざるか。糺明して居るでうか甚志氣悖と疑ひ給ふ處ある人ハ例の一色淦秀これの日頃を伺ひ此時こそ小栗を亡さんと思ひて持氏公の御前に出て云ふ様。実にも小栗満重前日君の御不興を蒙りしを憤り我子助重に鎌倉を騒さし。甚まぎれに乗し君を傾けまゐらせんと内々京都の命を蒙ると承りしと讒しければ持氏公深く小栗を疑ひ給ふに正なければ一色が讒を是なりと思し執るに頭人の輩に評議もなく小栗を討たまはんと俄に兵を集め給ふに執事家の憲実これを聞て大いに驚き例の一色が讒を信じ給ひ斯ハなし給ふなるらんと急ぎ御所に参り多く諫めけれど持氏公御聴なく却て御怒りを募らし給へバ家の執力なく家に還りぬ。蜜に小栗かゝる所の由を告知らせれバ満重大いに驚き罪なきに誤りなきを御所に参り陳じ申さんとありけれを田鍋平太諫らは持氏公の御光景を伺ひ一色淦秀の讒を信用し給ふにいかに陳じ給ふともいかで御許容のあるべきや寛罪にて御命を殺没しまゐらんより早く本国に下りたまひ時の至るを待て執るに如かじて謀なき旨を云解き君の不明をおふひ且小栗の家を全じすべしと勧めけれバ満重も実に道理なりと思ひ本國常陸なる田氣の城に逃下りぬ。此時ハ應永三十年五月のことく

家杉憲秋
同教朝
相州乱妨も

持氏公此由聞召大きに怒らせ給ひ急ぎ征伐をなすべしと一色詮秀に一千五百余騎をさし添て常陸国に下し給ふ小栗満重侍は今は詮なく人数時に恐ある一色が為に擒となりなんぞ無念の事なれ一軍して死なんとならんと知らざらんやと頻に籠城の准備をなしけるが是に小栗判官代助重は父満重君の御不審を蒙り田気の城に籠城をとげ侍ると聞伝へ一ばん亦不十人の侍臣を将て田気の城より越前の敦賀を免され倶に籠城せんと小池の庄平田渦平太にはかりて父満重に嘆けるは満重も今は助重を逐ひしを悔し給ければ対面して申けるは我先途を見届人とて籠城を望むこと健気にも嬉しけれ そもそも這回持氏公の御不審を蒙りしはせんさくに処は鎌倉を騒動させんとの流言より起りて然るに今汝を此城に籠城させば流言いよいよ実となりて不忠不義の名を後世に残さん然れば何に

無念なるにあらずや此道理をよくよく思ひて籠城の事は思ひ止まれかし されど此回の事は一色詮秀我家を亡し所領を奪ん為に讒せしと覚ゆるなり且君の御行状をうかがふに今故なきに軍馬を調練さし戎器を集めたまへり これおそらくは京都を傾けまゐらせんとおぼしたちぬるや其ことは已に前日我に命じあひし程なれば時節なりと強く諫め奉りしに御気色を損じ終に一色が讒行れしなり かかれば兎ても角ても逃れがたき我身なれば汝を擯斥の身とて誰もよく知ぬなれば何方にも忍び居て我討死と聞えなば仇とし君一色を討亡して家の名を再び故に復さしむるぞ是や実の孝なるぞと涙ながらに諭しける 助重これを聞中より涙に咽びけるがやや有て云けるは君の沙汰は心なく一色が如き奸悪なれば等く無念にこそ是彼のことどもおぼし明らかならずひそかに命を余所に

侍れど子として父の死んとするを見すてゝ去べき。不臣不孝の名を負とも天日いまだ地に隕落ず。寛罪の明なる放行こともはべらんに結城のことは兎まれ角まれ家名を建るは弟の方千代松を然りとなすべき満重俄に氣色を換て我一旦に與せし子に遜しくも對面するは郎等の手前も恥かしとおもふ家名を遣さんみなもとなれ。その道理を知るべく。子として父の命を聴ざるは不孝にあらざるか。さる白痴ものを我子となし思ひし助重よ親子の縁もこれ限りなり。とく去ねと追立る。紙門の裡に入たり助重悲しさやるかたなく熟おもへば去頃父の勘氣を蒙りて結城の里に潜り居憂日月を送りつ。父に對面せんとは神や佛に祈りしに甚甲斐ありて今日只今父に見ゆれば嬉しやと想ふ間もなく怒りに逢ひ。それさへ憂しと思ひきや永き別を

歎んとは。嗚呼無端世の中ぞと涙にくるゝ贅言は道理もまた殊なり。池庄平田鍋平太は前刻より此所に在て首尾の光景を窺ひ居しがこの時二人齋しく云入りければ。は嘆ひはさることながら大殿の心君を悪しとおぼさむにあらば後悔なることを嘆かせ給ふなり。其は志ぞをもし當ちにいたまらば。果しなきが孝子なり。父母没と雖善をなさんとして父母の令名を貽んことを思ふて為ど果ざるとも内則にもあらずや。況しも君とあるもは大殿の御志を續んとは存ぞれども年波の身のうへは果さざる間に亡人の数に入らんは必定なれば今潔く大殿の死出の供しえん悟せり。跡に遺せる男児亦を我にかはりてみ給はん御仕ひあひあらば冥加にあまる御恩ん今世の願ひとはれこそと信心つくして聞へ候。助重は父の命といひ且は二人が諫るに詮すべなくて肯へば。二人は深く

感謝をのべ斯ては主家がたゝには我們の後裔まで遺念なし。いざさらばと
此處に長居は妨多し。とく下城し給へと催促されば助重は公熱しく
落ても田氣の城をまろ出でたり。十人の従者は待うけて城中の首尾を問
ふ助重ありし事どもを詳に伝へきかせ、さても及ばぬ事として又乃
實期なき事なれバ今は忍びざるは事なり。敵寄ば小勢なりとも後
詰して追拂んと思ふぞ。汝等我力を助けなんやとありければ運一般に
いかで艱苦を君と倶にせざらんといふに助重も喜びさらば便宜の
所に忍び居るべしと従臣の輩と議し城より二里ばかりも隔たる山林に
主従十一人身を潜て伺ひ居れり。不在話下且説鎌倉の管領持氏公
小栗満重が征伐せんと一色詮秀を大將とし一千五百餘騎の軍兵を差
向られ寄手城近くおし寄せ陣を取る處に小栗満重これを望着

て寄手の大將は一色詮秀とぞ聞えたり。是は我怨ある人なり。いでさその彼
なる敵を追散しめ、よくば詮秀を討取るべしと逞兵三百余騎を將て池
庄平を先に進ませて打て出るに寄手案外に差ひども寄手の備整はざりしば
先陣一支も支へず乱れて引く本陣になだれかゝりしかば本陣も倶に崩れて
敵は敗北し遠く逃去りしかば池庄平士卒に下知し兵粮武具を奪ひ
城中に還りけり。寄手初度の戦に利を失ひ大きに氣臆れて城を攻ん
義勢もなく遠く退ひて陣をとりけり。城中よりこれを伺ひ妻く悪口して
斯て戦んとて罵りけれど固く守りて出合ざりけるにおのづから城中にては
或は朝がけ夜討などさまざまに一度も勝ざるなかりしに寄手はなまなく懼れ
斯ては始終覚束なしと鎌倉へ斯と注進せるに持氏公いかにして近國
の悪徒等これに左祖せしは由々しき大事に及ぶべし。いざや我自ら走向ひ

一時に責はきんと俄に議會が出馬しあり。さて氣の城に出陣ある小栗ハ主に弓ひくことが恐れ。これより城兵の討て出るをとなし。邂逅寄手城責をすれバよく防ひでいろ。落びがうともみえざりけり。持氏公大に焦燥あり。士卒を下知し自ら先に進み既に堀隈まで馬を乗寄られしその時大手の門を押開き小栗孫次郎滿重赤地の錦の直垂に緋絨の鎧着て扇を揚て。持氏公を麾招き高らかに申けるハ。満重是より君へ申さんハ礼なく畏けれど止ことなければ恐ながら小臣君に對し奉り。聊野心をさしはさむといへど。一色詮秀が讒によりて事既に及べり。小臣背き奉るにあらざる證には出馬ありてより我より戦を催せしことなし。君に弓引きるも公なりそもく君ハ寛仁にして政道も正しかりしに一色といふ悪魔はきれ公を乱しまゐらせたり。そハ奈何となれバ治世を乱せし臣と云

ざれハ良ねの常と云へど。今故なくして俄に岳が綱諫し。戎器が集あつめこと何の所ぞや。想ふに京都と軍家を傾けまゐらせん結構なりけん。足臣として君を弑する大逆なり。いかで天道の恵護あらんや。勢ひに乗じ御本意を遂させ給ふとも反逆の名は逃まじ。小臣此事を嘆て諫く死するハ臣下の常なり。心を裂て比干に及ばずとも諫めしに眼を東門に懸られし伍子胥が忠なりけり。今ハ自殺して御憤りを晴けやまん小臣こそ悪とならずとも城中にあるものどもハ不便とおもひし命ばかりハ助けたまへといふよりも鎧を脱ひく諸祖ぎ永なる短刀が左の服に突立て右へぎりとと引廻せバ殿に立られし池庄平主の首を打落しかへす刀がはや此嗜み俯になりて失ありし。此時射城中俄かに火發り焔々として燒あがれバ此年月るにより乗し城中の男女獨手の門より逃れ出れバ一色詮秀も

奥氏落城
藤浪万千代を将て城を逃る
藤浪
万千代

討んとせしを持氏公小栗が最期の願なかり叶へ行き給へと制し給ひしかバ。
城中のもの残らず逃るゝ事をゆるされけり此時意渡も方々代を倶し城を
遁れ其行衛をしらざりけり田鍋平太ハ城中にして自殺せしとぞ。さて又
小栗判官代助重ハ田舎城の後詰せんと山林に身を躱し寄手の
来らバ待うけしに天より不測の雲雨ありけれバ人に不意病あるハ此
南附助重風のここちしてくるしけれバ衛もなく重けなりゆひて終にハ人事
を知らぬまで煩ひしかバ。十人の侍臣ハ大に驚き介保なしけるほどに。
当国へ小栗征伐の軍陣よせて此地方の民四方に散乱し医師なんど
のあることなし況てや耕耘して糞せざれば稲粱のごとく。たゞ人命に患
あることも速に本服せんこと覚束なしと人々相議し結城へハ近ければ住
馴し地方なれバ彼所に行て治療を加へんと病る助重を扶け下総の
結城に伴ひゆけば。此所三郎七郎既に没命つれど田鍋が武芸の弟子
なりし僧どもに此人々の情によりて想をうけ治療を加へ二月をも
経て漸に快くなりぬ十人の侍臣ハ喜んで。いざさらバ田舎城の後ぞ
せんと人数を語らふうちにはや田氣も落城し満重生害とぞきこえけれバ今
そ浙がるに後詰せんと。助重が嘆きハさらなりも云ふなど十人の侍臣ハも
親をも亡ひ妻子をも殺しければ。悲しく三憤くして限りなし此うへハ且ふ一旦
経秀が討ての然ふを晴さバべしと一色が首を耗をせふや鎌倉に還り
ねとありしかバ。此上ハ鎌倉に至り仇を報んとて従十一人のとしゝめひやうに
旅発て鎌倉へとぞ赴きけるは漸くれども小栗助重ハ持氏公の討手を
うけし満重が子なれバ。明白に鎌倉へ入ることもなり難く。相模国権現
堂村といふ所に旅宿を営み暫時此所に滞留して。一色が行状を伺ひ

詮秀常陸より還りて后君の仰おふせまろらしよく小栗が舊館さへ
賜り。甚所をば別荘となし日毎に行て。遊観の所となさせ給ひしを傳へ聞て
小栗大ひに憤り。何時も早く彼を討て重る怨を晴さんと主従十一人
権現堂村をこち立直に鎌倉に行んとせしかど世の憚ある故。我より
を悪かりなんと此地方より鎌倉へゆく。山越の間道あればこそこの忍び
行んと其道を捜索て急ぎれば。さらぬ人里に遠ざかり山路ならぬ道なく
問べき人家もなく少に山樵牧童なんどに遭道のミなれば七つの岳
なごきを右に認り。西に攀べきを北に上りなどし僅に五六里ばかりを
ある行程を朝より夕に至るまでたどりしかども一つの小社にいたり
着ぬ。これより麓の方をミれ下せば大きなる社院あり其辺七八十
軒の小家見えたり。小栗想ふやう。今日は既に申の下刻に近ければ

今夜はこの麓に宿を借らばやと嶺をおりて人家在所に至りしに。
数十人にて一乗の女輿をとり囲ミ大道狭しと通りかかる。小栗主従これ
をみて是は此地方の地頭か代官なんどの妻か女児の往来するにやと
皆笠を傾け道の傍に寄て通りすぐるを先導の下僕なるもの
憤り汝等は何者なれば我姫君の通りますに笠をば取ざるとて多勢の
下僕立かかりて人々の笠をかいとり捨たり。十人の勇士等大きに怒り。
我らは他国のものなれば此地のことを知らず。然るに如斯狼藉に及ぶ
ぞ奇怪なりとひしめくを。小栗制し止めてこれを宥めば。下僕等なほ
小栗が宥るに乗じ。尚悪言を出して恥しむ。勇士等堪へかねて。
ことごとく事に及んとするを其府輿の裡より傍にありける侍女をして下僕等
を制させて小栗に云しけるは目今下僕等が無礼をば恕し給へ

源氏狭衣之
夢の浮橋ゆ跡まがひてあまたの中に伝あまた
浮またがふ何の衛火に宿のまがひの中に
聞くも娘は何の上調子に浮舟きいぶかへ

月見り遊べど花を
見捨行唇いれぬかと
山は笑ふかれ
六谷角平稲

掃加登見太良君

小栗外傳巻之四終

北郡芳

旅人に向ひまゐらせ給ふことあれバ今夜ハ我家に宿りまゐらせんやといひ
けるに小栗さらバ忝けれど只今子細ありて急ぐ身なれバとて行過けるを
のこなたにハ今夜の宿をさへ借んとあれバ甚だふしぎに思ひ
はじめし借れ行に前に小鎖よりうかゞひし壮院の前に出ぬ。その嚴重
なる事城のごとし彼輿ハ此壮院の裏に舁入たり侍女も續きて小栗
主従を伴ひ入一軒の別館に請じたり。小栗を從いと不審ければ何人の
館にて輿中の婦人ハ何等の人ぞやと各只これ夢のごとく又醉ばか
りにて恍惚として居たりけり。